

白山ふるさと文学賞

第四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

中高校生の部 優秀賞

## 私の原動力

白嶺中学校三年

高桑 たかくわ

優衣 ゆい

中学二年生の終わりぐらいだろうか。私は家族と会話をしたりすることが面倒でしかたがない。家族との会話なんて必要最低限のことだけでよいと考えるようになった。自分に話しかけていると分かっているが返事をしないこともしばしばある。高校生になったら下宿をしたいという願望もある。とにかく家族から離れたいという気持ちが強い。きつと今は反抗期だ。

夏休み直前。夏休みに読む本を探すため学校の図書室に行った。

このとき私は一冊の本に出会った。「おおかみこどもの雨と雪」だ。表紙には母親らしき女性が、二人の幼い子供を抱っこしている姿が描かれていた。私も母に抱っこされているときがあつたなと少し懐かしい気持ちになり、この本を読むことに決めた。

本の表紙に描かれていた女性は、花という名前であることが分かった。花は一人で二人の子供を育て、様々な苦勞を家族で乗り越えていた。

ここでふと、私は家族、特に支えてくれている母について考えるきっかけとなるのではないかと考えた。

花は、とにかく一生懸命だ。どうしてそんなに頑張れるのかというほどこに一生懸命である。しかし、本を読み進めていくうちに花が抱きかかえていた二人の子供が関係しているのではないかと思った。花の行動はどれを見ても二人の子供のためだと気がついた。花の原動力はその二人の子供であると分かった。

これに気付いたとき、私は思い出した。

少し前、弟が大げがをし、手術をした。母は病院に行っていたのだが、私は家にいた。何もすることができない自分の無力さが悔しくて悔しくてしかたがなかった。母に「何もできなくてごめん」と電話で伝えた。すると、「そんなこと言わん」といって。お母さんの原動力は優花らなんやから。」と優しい口調で母は言った。ここではじめて私が母の原動力であると分かった。今考えてみると納得できる。働いていて疲弊しているはずなのに、毎日三食のごはんや洗濯、そうじをしている。自分が生活する

ためというのかもしれないが、自分のためだけならさぼってしまふ日もあるのではないかと思う。私は一日としてそのさぼっている姿を見たことがない。

母の原動力が私なら、私の原動力は何だろうと疑問を持った。考える私の原動力は母ではないかと考えた。私の原動力が母であるということがよく分かるのは、部活動だ。私は大会でいい成績を残し、賞状を家に持って帰りたいという気持ちが強かった。朝早くに起きて弁当を作ってくれて、大会の会場が遠くても応援にきてくれる母に、結果で返したい、そう強く思い、辛い部活動にも、耐えることができた。

きつと、いくら話さなくても、高校生になつて遠くに暮らしていたとしても、私は母から離れることはないと思う。私は気付かないうちに母を原動力としていた。最近気付いたこのことを、本当は母に言えたらと思う。私と会話をしようと思ってくれたのに、空返事や無視はとも傷ついたと思う。今もずっと私を支えてくれていることに対してあげがとうと言いたい。しかし今の私は、家族との会話が得意ではない。けれども、この文の中だけで自分がどう思っているのかを語るのではなく、いつになるかは分からないが、支えてくれている母に、私の原動力は母であることを必ず伝えたいと思う。そして感謝したい。